

Nature 創刊号について

豆知識ア：ネイチャーは1869年11月4日に創刊された。ガチ理系の雑誌かというところ、そうでもない。その最初に掲げられた言葉（エピグラフ）は、英国北西部の湖水地方に住んだロマン派の詩人として知られるウィリアム・ワーズワス（1770-1850）のソネット集第36番「A VOLANT TRIBE OF BARDS ON EARTH ARE FOUND」（1823）からの引用である。

“To the solid ground

Of Nature trusts the mind which builds for aye.” – WORDSWORTH

元のソネットでは「nature」だったのが「Nature」に、また「Mind」が「mind」に変えられている。ワーズワス一流の隠遁者が静かに佇（たたず）んでいる湖水地方の自然のイメージと、ネイチャーの創刊者が雑誌名「Nature」に込めたイメージを区別するためであろうか。そこで、このエピグラフをインパクトファクター（論文の評判の物差し）の高いネイチャーに敬意を表して超訳すると

ー 永久に科学を創造する精神は「ネイチャー」の確かなお墨付き（インパクトファクター）に頼る ー
となる。もとのソネットの意味や創刊号の意図から遠くはなれていることは注意されたい。

豆知識イ：ネイチャーは1869年11月4日に創刊された。ガチ理系の雑誌かというところ、そうでもない。創刊号1ページ目の巻頭言（最初の記事）は、大文豪ゲーテの文章「自然-断章-」の進化論学者トーマス・ハックスリー教授による英訳「Goethe: Aphorisms on Nature」と、その解説である。

この「自然-断章-」は、当時から人口に膾炙（かいしゃ）するゲーテの自然観であったようで、ハックスリーは若い頃からこれに親しみ、ネイチャーの編者から巻頭言を頼まれたときに思いついたと記している。「自然-断章-」の内容については、ゲーテ全集を見れば日本語で読むことができるので、ここでは深入りはしない。それにしても大詩人、大作家、政治家にして、自然科学者でもあったゲーテの文章を巻頭言にもってくるとはハックスリーも当時のネイチャーもお目が高いではないか！

ところが、である。ゲーテ全集の訳注によれば、この「自然-断章-」は後期ヘレニズムの第十のオルフォイス讃歌をトブラー（Georg Christof Tobler）がドイツ語に訳したものであることが、文献学的事実で、ドイツ文学研究者にはよく知られている。つまりネイチャー創刊号の巻頭言はゲーテではない。残念な物語である。しかし、ネイチャー創刊号の復刻とそのWEBにはそのことが記されていない。だから、ゲーテゆえに、英国らしい教養溢れる最高峰の科学誌と述べると間違いになる。

参考：<http://www.nature.com/nature/about/first>

山内久明編：対訳 ワーズワス詩集—イギリス詩人選〈3〉、岩波文庫、1998年。

木村直司他訳：ゲーテ全集 14 自然科学論、潮出版、1980年。